

「委細承知仕りました」

治兵衛は吃驚りして歸つて參りました、番頭の傳兵衛は若しや例の一件が発覺やせぬかと心配で、胸がドキ／＼仕し居ります。

「ハイ今歸りました、モウ誰も出ていません」

「ヘイ、皆宅に居ります」

「フム左様か、少し都合があるので今夜はモウ店を閉めて、何誰が買ひに御座つても開ける事はならん、併し焼酎を買ひに御座つたら開けにやららん、サア臺所へ燈を點しとくれ、そして家内中の者皆此處へ來とくれ」

「旦那さん何で御座ります」

「イヤ他ぢやないが、今日七ツ過ぎに宅で居酒した人があるそうな、誰が酒を賣つた……ア、太七」

「ヘエ……」

「お前か」

「イ、エ、私は伯母が病氣でお暇をいただきまして、自宅へ歸りまして只今此方へ歸つて參りました所で、私は一向存じません」

「そんなら、久七お前か」

「イ、エ、私は土藏で用事を仕て居りました」

「フン、それでは番頭どんか」

「イ、エ、私は、アノ……少し腹痛で二階で寝て居りました」

「フウ、……丁稚、其方か」

「私は臺所で股引の繕縫を仕ておりましたので、知りまへん」

「左様か、實は今會所へ行つたと今今日二人の賊をお召捕になつた、其の者の白狀に二十五兩の金子を宅の店先で落したと云ふ事であるが、私は今日不在で解らぬ事、これが知れなんたら大變ぢや、私の一命に係る事、明朝までに拾ふた者があつたら知らしとくれ」

と家内の者は皆寝ましたが、寝られんのは番頭だす、蒲團の上で坐つたまゝ、手を拱いて心配顔。

「アー失策た、あつさり云ふて仕舞ふたらよかつた、此の盗んだ金子を持つてたら、明日になつたら捕へられ、不届者奴と首がコロリと落る、アーわやゝ、これをいつそこうして……」

と店の火鉢の中へ投込んでおきました。明朝になつて女中が火鉢に火を入れようとして見付けまして、

「旦那さん、火鉢の中にお金子が落ちていました」

「オ、そうか、それは有難い、この金子が出たら家内安全息災ぢや」